

令和2年8月4日(火)

令和2年度 1学期終業式

まだ、全校生徒を目の前にして一度も話をしたことがない、校長の川越です。マスクをしているので、顔もわかりません。このままでは、校長は本当は実在しない、という都市伝説が生まれそうで、怖いです。1学期の終業式のお話をします。

本当は、今週の金曜日、8月6日が終業式の予定でしたが、皆さんご存じのとおり、コロナウィルス感染症拡大のため、少し早めに夏休みに入ることにしました。思えば、4月から今日まで、コロナ・ウィルスに翻弄されっぱなしの1学期でした。高校総体、萌樹祭をはじめ、様々な大会や行事が中止や延期になり、生徒の皆さんは、残念な思いをしたことと思います。そんな中でも、なんとかクラスマッチが実施でき、さあ、これから萌樹祭に向けての準備、という矢先、延岡がレッドゾーン（感染状況の厳しい地域）に指定され、県から、延岡の高校を臨時休校とする旨の通知があったところです。

ただ、8月末の萌樹祭は、なんととしてでも実施したいと考えています。私は、君たちが輝く姿をどうしても見たい。実施を可能にするためには、今後、先生方も、生徒のみなさんも、コロナウィルス感染症に、絶対に一人たりとも罹ることがないように、細心の心配りをし、慎重な行動を取る必要があります。みんなで協力しながら、多少の窮屈さも我慢しながら、必ず、萌樹祭を開催し、成功に導きましょう。

さて、今日は一つだけお話をします。言葉についてのお話です。

実は、私はもともと、国語の教師です。大学は、高校の国語の教員免許が取れる大学に行きました。とても貧乏だったので、いろんなアルバイトをして、生活費を稼いでいました。バイトの中で割がよく、たくさん報酬がもらえるのは、やはり家庭教師。私は、あるとき、「Sさん」という、中学2年生の女子生徒の家庭教師をしました。この子が、なかなか大変な生徒で、学力的にかなり厳しい。例えば、中学2年が終わろうしているのに、「I・my・me・mine」という英語の人称が憶えられない。というか、そもそも憶える気がない。漢字の書き取りも、小学校の中学年レベル。かなり根気よく教えるんですが、なかなか成績が上がらない。

あるとき、このSさんの言葉の使い方で、気づいたことがありました。それは、極端な話ですが、この子はどうやら、3つの言葉で会話をすまそうとする傾向がある、ということでした。3つの言葉とは、「ナウいね」「別に」「しけー」。この3つです。君たちは、ナウって言葉知ってますか？もうとっくに死語ですが、ナウ＝新しいという英語に「い」をつけて、形容詞みたいにしたものですね。新しいね、カッコいいね、というニュアンス。Sさんは「先生のシャーペン、ナウいね」なんていう。そして、私が、学校は面白い？と聞くと、「別に」。私が、冗談を言うと、「しけー」。しけてる、つまんないという意味ですね。結局、Sさんはこの3つの言葉で、様々な状況を乗り切っている。これは、考えてみるとよくできていて、プラスの評価は「ナウいね」。マイナスの評価は「シケー」。どっちでもいいものには「別に」。これでまあ、生きてはいけるわけです。生きてはいける

んですが、Sさんなりの、Sさんらしい、Sさんにしかない感情や思いは表現されない。結局Sさんの複雑で微妙な思いは相手に伝わらない。

そのころ、ある新聞のコラムを読んでいて、このSさんの謎が少し解けた、と思ったことがありました。井上ひさしという作家が、こう書いていたんです。「言葉は伝達の道具であると同時に、思考の道具でもある」。言語には、「外的な言語」、しゃべったり書いたりすることで、表に現れる言語、いわゆるコミュニケーションで使われる言語と、脳の中で人が考える、思考するときに働く「内的な言語」がある。そして、内的な言語を増やし、豊かにすることで、考える力、思考力は育つのだ。そういえば、Sさん、言葉に興味がないし、自分の言葉を増やそうとしてないわ、ということに気づいたんですね。これでは、学力が上がるはずがない。次の日から、私は教科書ではなく、絵本や詩集、童話で授業をすることにしました。それで、少しずつですが、言葉に興味をもってくれるようになって、本当に少しずつですが、成績も上がってきた。最後は、なんとか高校にも合格してくれました。言葉は、コミュニケーション、伝達のための道具であると同時に、人が思考するときの道具でもある。だからこそ、意識をして、自分の手持ちの言葉を増やしていく必要がある。Sさんは、自分に大事なことを教えてくれました。

そして、そのころ、言葉にはもう一つの大事な働きがあることにも気づかされました。

ある二人の方のインタビュー記事を読んだのです。その一人が、映画監督の宮崎駿です。宮崎駿はインタビュアーに、「あなたの作品には、本当の悪人が出てこないようだが、あなたが考える本当の悪人とは、どんな人ですか」と聞かれた。宮崎駿はなんと答えたか。「人を殺した人間が悪人とは限らない。本当の悪人は、人を殺したことの意味がわからない人。想像力の欠如した人間が、本当の悪人だ」と答えたんです。

もう一人が、テニスプレーヤーのジョン・マッケンローです。かなり前の選手なので、皆さんは知らないでしょうが、「悪童」と呼ばれ、審判には平気で文句を言う、ラケットは投げ捨てる、というあまりよろしくない態度が目立つ。でも、テニスのプレーは超一流。当時、ピヨン・ボルグというとても強い選手がいましたが、その選手とも対等にわたり合っていた。そのマッケンローが、あるインタビューで、「なぜ、あなたはそんなに強いんですか」と聞かれた。私は、生意気な選手だから、てっきり、「才能だよ」なんて答えるのかなと、思っていたら、違っていました。「自分は体は細いし、ピヨン・ボルグのような体力も技術もない。ただ、自分は誰よりも、強く鮮やかなイメージを持つことができる」「ほとんどの選手は、明確なイメージを持たずに練習をする。自分は、このボールを、この位置でとらえ、打ち返したら、相手コートはどこに落ちるか、それを美しくイメージできる。そのイメージに近づくために練習しているから、強くなれるんだと思う」。

当時、自分はなぜ国語の教師になるのか、生徒にどんな力をつければいいのか、そんなことを悩みながら大学生活を送っていて、そのころ出した結論が、「言葉は思考の道具であり、想像力や感性を耕してくれるもの。だから、教える価値がある」というものでした。本に書いてある文字を目で追って、それをもとに考えたり、イメージしたりすることは、とても疲れるし、大変ですね。でも言葉に触れるということは、思考を深め、想像力を豊

かにし、感性を豊かにすることに、きつとつながる。

今、世の中のいろんなトラブルや誤解、そのほとんどが、言葉から生まれていますね。最近ではテレビ番組に出演していた女子プロレスラーの方が、誹謗中傷によって命を絶ちました。亡くなった若い男性の俳優さんも、そのせいかは分かりませんが、ネットでの批判に悩んでいたという話を聞きました。もともと、考える力を育て、想像力（思いやり）や豊かな感性を育むはずの言葉が、今、人を傷つけるための道具になっている。

みなさんには、言葉を大事に扱ってほしいし、手持ちの言葉をどんどん増やしてほしい。それは、きつと、皆さんの人生を豊かにしてくれると思います。

当初、終業式をする予定だった8月6日は「立秋」です。秋の気配が漂い始める季節に、だんだん近づいていきます。若山牧水の歌に、

眼をあげよ もの思ふなかれ 秋ぞ立つ いざみづからを 新しくせよ
という歌があります。さあ、下を向いてないで、顔を上げなさい。くよくよと思い悩んだりしてはいけない。今日は秋のはじまりの日、立秋だ。さあ、これまでの自分を捨てて、新しい自分になるんだ、という意味です。私は、この牧水の歌にあるように、君たちにとって、夏休みが、一人で過ごす時間が、「みづからを新しく」するきっかけになったらいいな、と思っています。人は、覚悟次第で変わります。たった一日で、たった一瞬で、たった一言で、たった一度の経験で、劇的に変わることがある。そんな生徒たちを、私は教師という仕事をする中で、実際にたくさん見てきました。自分についてじっくり考える時間を持ち、自分の覚悟を言葉にしてみる。そして、一つでもいいから決めたことを行動に移す。自分で考える時間を大切に、自分の中の何かを変えるきっかけにしてほしいと思っています。

それでは、2学期に、また元気で会いましょう。